

第8話 映画の話

インド映画といえば日本でも以前「踊るマハラジャ」が話題になりましたが、インド娯楽映画の特徴はまずは長いこと、3時間位は普通です。そして少し飽きたかなと思う頃、突然ストーリーとはほとんど関係なく大勢による歌と踊りが始まり驚かせてくれます。そして言葉が解らなくても何となく解るようなストーリーです。

例えばアルワリアやスーベラも泣いた継母人情ものを紹介しますと、夫が出張に出かけた夜、残った妻と娘が遊園地に遊びに行って観覧車に乗っていたらその観覧車に夫と見知らぬ女性が乗っているのです。二人がお互いに気がつく驚愕の表情が何度もアップ。動転した夫は帰りに交通事故を起こし連れの女性と一緒に亡くなるのですが、病院に駆けつけた妻に女性との隠し子の面倒を頼み息を引き取ります。その後妻は自分の娘だけかわいがり隠し子をいじめるのですが、大きくなったその娘が最後は自分を助けてくれて仲直り。この場面で大の男も泣くのです。人情物意外ではアクション物がありますが、突然大勢で踊りだすのはみな同じです。

座席は20ルピーから2階バルコニーの指定席100ルピーまで5段階に分かれていました。サニーの家族と行った時、お金を渡したらサニーは全員に指定席を買ってきましたがこういうところはサニーはぬかりがありません。

ところでこのバルコニー席にいるインド人はいわゆる金回りの良い新興階級という感じなのです。驚いたのは上映中携帯電話がかかって来て大きな音が鳴っているのにしばらく出ないのです。『どうだ、俺の携帯が鳴ってるぞ。お前ら携帯なんか持っていないだろ』という感じで、そのうちおもむろに取り出しその場で平気でしゃべりだします。やっと終わったと思ったら今度は違うところでベルがなり同じ光景です。それに対し携帯を持ってない？インド人は誰も文句をいう風でもありません。ひょっとしたら俺も早く携帯を鳴らしたいナと思っているのかもしれませんが。少しお金を持つと人が変わるというのはいずれも同じですが、これからインドもこういう人達が増えるんでしょうね。

